

皆神山外周コース
スタート
川中島バス発着所

↓10分

① 虫歌観音堂

↓5分

② 金刀比羅社

↓10分

③ 西条欠集落

↓5分

④ 諏訪大明神

↓5分

⑤ 閑屋一族の碑

↓六種字石

↓7分

⑥ 源閑神社

↓5分

⑦ 赤柴間魔堂跡

↓3分

⑧ 伊勢宮神宮

↓10分

⑨ 明徳寺

↓15分

⑩ 桑井神社

↓10分

⑪ 桑井空塚古墳

↓7分

⑫ 藤沢萩神社

↓7分

⑬ 山伏石

↓3分

⑭ 諏訪社

↓20分

ゴール
川中島バス発着所

トータル約2時間
(+休憩・見学時間)

皆神山登拝コース
南参道 車(歩)

スタート桑井井
エバーグリーン登山口

↓3分(15分)

岩戸神社

↓5分(15分)

車駐車場 以下徒歩

皆神山侍徳大神

↓境内散策(20分)

隨神門

↓(10分)

小丸山古墳

↓大日堂まで北参道
徒歩15分

↓(15分)

隨神門

車駐車場

1 桑台院虫歌観音堂 ふたいんむしゅうたかのんどう

大同(だいとう)元年(806)、坂上田村麻呂の建立と伝わる。また一説には、天文(てんぶん)13年(1544)、福徳寺六世快雄法印が靈夢を受け、建立したとの伝もある。古くは豊榮村にあった引虫寺(虫取寺)であったとも言われ、明治初年に廢寺となり、福徳寺が管理している。本尊は、伝行基菩薩(ぎょうきばさつ)作の千手觀世音。本堂は、天保(てんぱう)6年(1835)再建。仁王門は正徳4年(1714)建立。養蚕守護神として慕われ、縁側には近郷からの参拝者でにぎわった。信濃十三番觀世音七番札所、真言宗。

2 金刀比羅神社 こひらじんじゃ

虫歌観音堂の正面、真田線の旧道に参道跡。人家のあいだをぬってかすかに残る小道を行くと出会う。江戸後期、松代藩による宮崎地区の新田開発の際、水害を避けるため、水上安全の守護神で水を制する金刀比羅大神を主神として勧請し、文政2年(1819)、社殿を建立したという。入母屋造り本殿に石祠が祀られている。例祭は9月15日、境内には他に秋葉神社、大山社などがある。天保12年(1841)建立の鳥居は、昭和34年の伊勢湾台風で倒壊、54年に皆神山神社領の御神木で再建された。

皆神山 みなかみやま

豊栄のシンボル皆神山。標高659メートル、周囲8キロ、丸みを帯びた山頂と急傾斜の斜面をもつ溶岩円頂丘(溶岩ドーム)形の独立峰で、霧光明媚な地としても知られる。中世僧叢國の修驗道本山派の中心と合院をもって築え、攝古於呂志祭(ねごろしさい)や小麥祭など古式ゆかしい祭を伝えている。地元人にとって信仰、祈りの山である一方、「皆神山ビラミッド説」やアニメ「オカルト学院」放映など、いつも不思議な話題を投げかける松代のパワースポットでもある。



21 熊野出速雄神社 くまのいはずはやおじんじゃ

皆神山頂に祭られている神社。閑屋に移ってきた諏訪神氏大祝為仲の子孫が、この地方の開拓神、農耕神として出速雄命を祭祀したことから始まるという。社伝では創建が養老2年(718)、康応元年(元中6年/1389)再建。戦国末期には、皆神山修験が県下の修験を統括するまでに勢力を拡大している。鐘木造りの現社殿は室町時代のもので、埴科郡最古の建物。宝物殿に、永正4年(1507)作の大日如来座像などの木像三躯がある。御神木ヒムロビックシンドは、推定樹齢800余年、根回り4.2メートル、樹高14メートルの古樹。境内に侍徳大神社、富士浅間神社などがある。



22 クロサンショウウオの産卵池

皆神山の山頂には大堀池、ひょうたん池(みそぎ池)・用水池と呼ばれる三つの池があり、大堀池は飲み水、みそぎ池は禊用、用水池は畑などの灌漑用の水として使われていた。用水池の東側には「呼び井戸」といわれる井戸がある。この池は市の天然記念物クロサンショウウオの産卵池としても知られている。



23 岩戸神社(南大平古墳) みなみおおひらこふん

皆神山の南側中腹斜面、南大平地籍にある6世紀ごろの横穴式石室がある後期古墳。円墳の積石塚で、径18メートル、高さ6.2メートル。石室の全長は7.7メートルで、玄室は3.94メートル。羨道部の入口や天井石の一部は平林の道祖神や皆神神社の建立に使われた。ここは岩戸神社とも称され、豊受大神が祀られている。入口付近に「皆神山ビラミッドの入口ではないか」との看板がある。



19 小丸山古墳 こまるやまこふん

直径30メートル、高さ4.6メートルの大円墳。皆神山の北側平地を支配した有力者の墓で、築造当初は、支配地を臨む見晴らしの良い場所だった。墳丘一部に葺き石、周りには周溝があり、堅穴石室のある古墳時代中期の円墳で、円筒埴輪も出土している。墳頂には、盗掘の跡を物語る塞地と大山祇命を祀る山ノ神の祠がある。寺伝では和合院の祖で舒明天皇第三皇子の古人大兄命(ふるひとのおおのみこと)の陵墓とも伝わる。

24 山伏石 やまぶしいし

もとは皆神山旧参道入口にあったが、圓場整備のため平林の村北地籍に移された。この石は権九郎石と呼ばれ、高さ1.1メートルほどの三角形の自然石。そばに「享保六年□□と彫られた石仏がたたずむ。桑根井村の武術家井野口権九郎と試合して敗れ異郷に倒れた山伏(武芸者)を供養した石で、靈験もあらたか。粗末にすればいたりがある」と伝えられている。



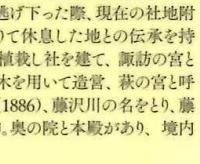
14 桑根井空塚古墳 くわいのそらづかこふん

桑根井には10余基の古墳が点在するがその中で最も大きい積石塚の円墳で、径17メートル、高さ3.4メートル。屋根形天井がある合掌形石室はほとんど完全な形で、廃棄、真南に開口している。古墳時代後期に属する土の上には何軒かの古墓が築かれている。古墳の上に屹立するタケギの古木は、推定樹齢200年、幹回り3.4メートル、樹高12メートルのタケギの古木が古墳に涼を注いでいる。



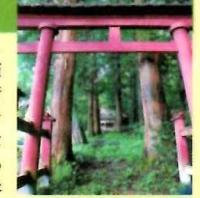
15 藤沢萩神社 ふじさわはぎじんじゃ

御名方富命が出来雲国から信濃に逃げ下った際、現在の社地附近の住民が出迎え、命は舟から降りて休息した地との伝承を持つ。当初、中庭の三方土手に社木を植栽し社を建て、諏訪の宮としながら、用材が不足し、境内の萩の木を用いて造営、萩の宮と呼ばれるようになったといふ。明治19年(1886)、藤沢川の名をとり、藤沢萩神社と改名。祭神は諏訪大明神。奥の院と本殿があり、境内に皇大神宮などの摂社がある。



12 桑井神社 くわいじんじゃ

桑井大明神勅諭は文亀2年(1502)。「白髪の神人が来て、劍で千草を薙ぎ捨て、農夫の鍬を取り地を掘ると清水が湧き出、絶えることがなかった。そこを銀井井といつた。翁の姿が消えた林を銀井井の神と崇めた」との伝承もある(「池田宮御手洗弁財天由来記」)。祭神は、建御名方命、八坂刀売命、天照大神。本殿、覆殿、押殿があり、境内には他に金毘羅社など四社が祭られている。4月15日が春季大祭、12月28日が大祓祭。



10 諏訪社 すわしゃ

諏訪社とは、諏訪大社から祭神の勅請を受けた神社。平林の諏訪社の祭神は建御名方命・八坂刀売命。例祭は11月23日。皆神山と合院が別社だったことが神社棟札から知られる。天明2年(1782)松代藩が作成した平林村絵図によると、本殿は板葺き平屋で拝殿があった。境内左に、獨特の鳥居を持つ金毘羅社、他に秋葉社なども祭られている。神社一帯は、鎌倉時代に、この地を支配していた英多荘地頭職(しき)平林氏の館跡と言われ、最近まで土塁が存在し、「政所」「花立」「大門」「塙内」「内塙」という館の時代を偲ぶ小字もあったという。



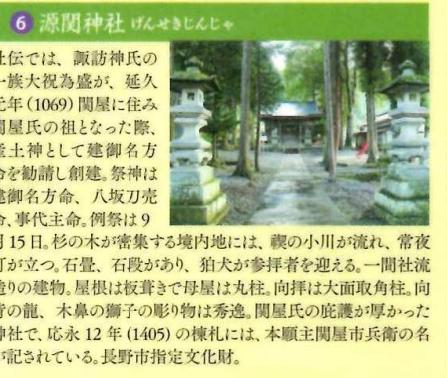
9 龍潭山明徳寺 りゅうたんさんめいとくじ

明徳元年(1390)建立、明徳寺号した。明応10年(1501)、保科広徳三世玉山春洞により、曹洞宗として再興開山。海津城将村上景園、松城藩主松平忠輝、松代藩主真田家が保護した。海津城主高坂禪正や太平洋戦争の硫黄島軍司令官栗林忠道中将の墓があり、本堂裏手には、「蛙合戦」で有名なヒキガエルの産卵池(長野市指定天然記念物)がある。本尊は釈迦牟尼佛。小僧に化け毎夜酒を買つた「酒飲み茆勤」の伝承もある。



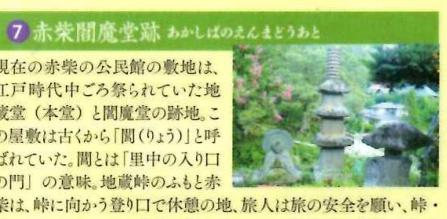
6 源閑神社 げんせきじんじゃ

社伝では、諏訪神氏の一族大祝が盛が、延久元年(1069)閑屋に住み閑屋氏の祖となった際、產土神として建御名方命を勅請し創建。祭神は建御名方命、八坂刀賣命、事代主命。例祭は9月15日。杉の木が密生する境内地には、禊の小川が流れ、常夜灯が立つ。石疊、石段があり、狛犬が参拝者を迎える。一間社流造りの建物。屋根は板葺きで母屋は九柱。向拝は大面取角柱。向拝の龍、木鼻の獅子の彫り物は秀逸。閑屋氏の底謹が厚かった神社で、応永12年(1405)の棟札には、本願主閑屋市兵衛の名が記されている。長野市指定文化財。



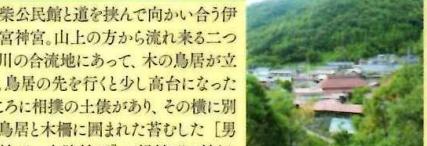
7 赤柴間魔堂跡 あかしばのはんまどうあと

現在の赤柴の公民館の敷地は、江戸時代中ごろ祭られていた地蔵堂(本堂)と閑屋堂の跡地。この屋敷は古くから「間(りょう)」と呼ばれていた。閑屋とは「里中の入り口の門」の意味。地蔵堂のふもと赤柴は、峰に向かう登り口で休息の地、旅人は旅の安全を願い、峰・境・辻に祭られた地蔵尊を拝み旅立った。閑最後の管理者晚成(ばんじょう)和尚は、明治6年(1873)まで、赤柴集落のどもに読み書き、算盤(そろばん)を教えていた寺子屋の師匠だった。



8 伊勢宮神宮 いせみやじんぐう

赤柴公民館と道を挟んで向かい合う伊勢宮神宮。山上の方から流れ来る二つの川の合流地にあって、木の鳥居が立つ。鳥居の先を行くと少し高台になったところに相撲の土俵があり、その横に別の鳥居と木柵に囲まれた苔むした「男陽神石・女陰神石」が縁結びの神として祀られている。ここから伊勢宮神宮の社まではかなり急な坂道を登って数ヶ所。山頂には展望台もあり、赤柴界隈を望むことができる。



西条[欠]及び周辺地域

3 西条[欠]集落 にじょううかけじゅらく

ノロシ山の峯を壠に西条地区山腹の一部地域が豊栄地区の中に抱かれているような形で、西条地区「欠」集落を形作っている。江戸時代、「真田(現上田市)～地蔵峯～松代城下」の北国脇往還・松代街道(現長野県真田線)が、東信・北信を結ぶ最短ルートとして利用され、ふもとの閑屋村に松代藩の口留番所(くちどめばんしょ)が置かれ、人や物資の出入りを監視。交通の要衝として藩の財政にも寄与した。宮門の両脇に設けた石の物見やすらの台を古く「間(りょう)」と書いた。この飛び地「欠」は松代にとって地理的に欠かせない要所の名残地名であるといえる。



4 欠の諏訪大明神

社伝では、欠村の産土神が、のち諏訪神となった。英多荘(あがたのしょう)・松代一帯の土著県氏(あがたし)の鎮守の宮でもあった。承久3年(1221)承久の乱の際に、県左近将監(さこんしょうげんげん)は、同社に武運を祈願し上洛、宇治橋の合戦で武勲をあげた。諏訪の古文書「守矢満実書留」に「大県介西条」、「西条」という記載があり、西条地区と県氏は古くから諏訪信仰とゆかりが深ったことが伺える。鳥居左に御神木ケヤキの古木。祭神は建御名方命、例祭は9月23日。境内には他に古峯社がある。

5 閑屋為仲公一族之碑 せきやためなかこういちぞくひ 六種字石 ろくそんしゅじせき

閑屋氏は諏訪神氏(じんし・みわし)の一族とされ、大祝為仲(おおほううりたぬなか)を祖として、その子為盛の時にこの地に移って閑屋氏を称したといふ。閑屋の地は交通の要衝地蔵峯のふもとにあり、閑屋氏は人の出入りや物資の流通を押さええたが、明応元年(1492)以後に、村上氏によって攻め滅ぼされた。積石塚状の墳丘にある閑屋家の墓所中央の供養塔は近世に建立された石塔で「閑屋為仲公一族之碑」と刻まれている。閑屋家の墓所から3本出土(平成22年8月)した県内最古級の銘文が刻まれた石柱は、「承元三年(1209)才次己巳七月十八日願主神行忠」「右志者為神行平口也」(口は善提の異字体か)の文字が読み取れる。上部6面に「バーケン(金剛界大日如来)、バク(釈迦如来)などの種字(梵字)が大きくなっているところから、平安末期から鎌倉初期の特徴をもつた石柱と推測されている。

